

Title	『是害坊絵』二本解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1993
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.28 (1993.) ,p.345- 355
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本隆信名誉教授追悼記念論集 資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000028-0345

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『是害坊絵』二本解題・翻刻

石川透

解題

ここに紹介する『是害坊絵』は、大唐の天狗是害坊が日本を魔道に引き入れようと渡来するが、仏の力により撃退されるといふ物語である。曼殊院に延慶元（一三〇八）年の元奥書を有する絵巻が伝存しており、鎌倉時代には成立していたことがわかる。この曼殊院本は、既に影印翻刻も行われ、梅津次郎氏等の研究もなされている。

一方、この物語は室町時代に謡曲に仕立てられ、現代に至るまで上演されており、その研究もなされている。実は、小生も

「『善界』表現考」（『観世』一九八八年十一月）を記し、『是害坊絵』との関係にも触れた。また、その中でも述べたように、両者の関係を明らかにするには、『是害坊絵』内部の異本関係を考察する必要があるのである。

『是害坊絵』の異本については、梅津次郎氏「是害坊絵巻の変遷」（『国華』一九四八年六・七月）で先鞭がつけられ、友久武文氏「『是害坊絵』の諸本」（『広島女子大学文学部紀要』第一六号・一九八一年）により、増補整理された。友久氏は、『是害坊絵』を大きく甲乙二類に分け、さらに甲類を第一種から第四種の四種類に分類しておられる。この分類法は、松本隆信氏

「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』一九八二年)にも踏襲された。『是害坊絵』は、正確には鎌倉時代成立の物語であるが、室町時代以降成立と思われる異本が多く存在することから、このように室町物語としても扱われているのである。

ところが、残念なことに、異本として翻刻紹介されているのは、甲類第四種の慶応義塾図書館蔵の寛文十一年写絵巻のみで、『是害坊絵』の異本文研究に支障をきたしていた。実は、これらの『是害坊絵』異本の中で注目すべきなのは、友久氏による甲類第三種であろう。友久氏自身、前掲論文の中で、

詞書をはずし、絵と絵詞によって物語内容を享受したらしい第三種本が重要かと考える。そうした享受の方法に伴って、絵詞の発展がみられ、筋の改変も生じたのであろう。発展した絵詞を詞書本文ふうに読み、かつ改める傾向が窺えたことにも注目しておきたい。

と述べておられるように、絵詞が会話文として生き生きと記されているのである。もっとも、この傾向は第三種本のものではないが、発展の仕方が顕著なのである。

甲類第三種本としては、現在、慶応義塾図書館蔵残闕本と徳

江元正氏蔵本の二本が知られている。慶応本は、室町末期から近世初期の書写で本文的には優れているが、その前半が欠けている。徳江本は、江戸中期の書写で、全文揃ってはいるが誤写が多く、部分的な欠文も見られる。よって、ここでは、両者とも翻刻を試みた。本来ならば、写真版によって絵の紹介も行いたい。それは後日を期したい。

以下に、二本の書誌を記す。

慶応義塾図書館蔵残闕本

番号、一三二X―五五―一

装訂、絵巻一軸

時代、「室町末近世初」写

表紙、焦茶色地亀甲花紋等銀糸繡裂表紙

紙高、三〇・〇糎

料紙、斐紙

外題、「是害坊絵巻 残闕」(本文別筆)

内題、ナシ

字高、二五・一糎

蔵印、「山田秋衛蔵書記」

徳江元正氏蔵本

番号、ナシ

装訂、絵巻一軸

時代、「江戸中期」写

表紙、茶色地雲形紋等金糸繡裂表紙

紙高、二五・八糎

料紙、斐紙

外題、ナシ

内題、ナシ

字高、二五・六糎

蔵印、ナシ

なかった。

最後に、本書の閲覧と翻刻掲載の御許可を賜った慶応義塾図書館と徳江元正氏に厚く御礼申し上げます。

翻刻に際して、次の方針をとった。

- 一、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。
- 二、私に句点・読点・「」等を記した。
- 三、破損箇所は□で示した。
- 四、意味不明箇所には、煩瑣になるので（ママ）等は記さ

是害坊絵巻 残闕(慶応本)

「御たすけ候へ」

「たゝかうべをうちわれ」

「さやうにはめされそ。日羅かわひ事にて候」

「さすか、日本をあなつり、さまたけをなすものを、たゝいた
め候へ」

日羅

「わらは同心にてなく候。日本の名をもあけ度こそ候へ。何事
に同心可申候哉。御ゆるし候へ」

二童子のいはく

「なんしも是害と一味同心たるへし。せんあく明王に申て、
たゝをくまし。是害はもとより命をたつへし。されとも、慈悲
は上よりしてくたり、なんちかうけにたち、仏法をもそたては、
命はかりをたすくへし。かまひて日本へきたるなど、よくく
いひきけよく」

日羅申やう

「今よりしては、日本へはきたるましと申候。我等かうけにた

ち申へし。いのちを御たすけ候て、本国へ御返し有へし」

去程に、仏たちにたゝかれて、あしこしたゝす、あをたこしら
へて、賀茂河のあたりにて、薬湯をたてゝいれんとて、日本の
小てんくとも、はやし物をして、みなくをくりなくさくさむ
る所也。

「いや、岩の上のしゆくし柿か、かなつちをてかふとは、是害
坊かふる舞、大けなき事かな。あらおかしや、せかいほう」

「いや、はなしの大ねたくみして、からいめにあひたるは、く
やしくやおほゆる。あらむさんや、是害坊。うり給へ、せかい
ほう」

「いや、くひに縄をつけらるゝは、へようたんかや、せかいほ
う」

「いや、はりことをしつるか、一手もとらてかへるはゑせ弓か、
せかい房」

「いや、ゑせうたか、せかいほう。こしおれてみゆるは、短冊
か、是害坊」

「いや、薬湯の中へ是害坊を入れて、によれ、ひよれ、ひよれ
く、ふたりよ」

「いや、物のはちのあたりたるは、たいこかや、せかいほう」

「いや、ひめのまへのまもりかたな、させる事もなくて、あらむさんや、是害坊」

「いや、時の尽にあらね共、ふひてをらふよ、是害はう」

「いや、しめ縄をかけて、ちやうくとうたるよは、つゝみや、せかい房」

「いや、こしの程にゆいつけて、かしらをうたるよは、やつはちかや、せかいほう」

「いや、天か下になをもえたる是害房は、こほねかおれてみゆる、せかい房」

「いや、神仏にきらはれて、何のよふにもたゝぬほとけの花か、せかいほう」

「いや、一むら雨のおりふし、はやしにつれてわたるは、郭公か、是害坊」

「いや、火界のしやにこかされて、はねの色もみちかや、せかい房」

「いや、仏たちにふまるよは、れんげかや、せかいほう」

「いや、しほくとなり行は、花の雨かや、せかいほう」
「いや、枝はかりうこひて、ちからなけにみゆるは、青柳かや、是害坊」

「いや、おもひまはしてけらるよは、庭のまりかや、せかいほう」

「うめきすかひてかゝるよは、連歌するか、せかい房」

是害

「しつくとかきたまへ。ゆられて目のまひ候へは、いかなる日我國を出て、かゝるうきめにあふやらん、うらめしさよ」

「いや、わらはれてかゝるよは、あくひかや、せかいほう」

「こうくわいはさきにたゝす、あらむさんや、是害房」

「是は、日羅房のちやくしなればこそ、かやうのくわんたいなる事を、是害房にむかいて申候へ」

日羅房

「かゝるなんきなる事哉。我等までしかられて面目なき事哉。

人のけうくんきかすして、あらせうしや」

「御せんしもの持て参候。よき程に御さまし候て、御まいりあるへし」

「御あかに参候はんか」

「今はあけまいらせ候へし。御めやまい候はんすらん、いか」

是害坊

「今すこしまち候へ。つゐてにかゆ所をたて候はん。あらよき程の湯のかけんや」

「さのみは湯は御とくにて候。ほとを御はからい候て、御あけ候へ」

「此竈の中に、よろつの葉共入候間、一段よくあるへし。仏たちいたゞかれて、すちほねいたく候事も、けんになり候へし」

「木はもえすけふりはかりのかまとをはにきあふたみと人やいふらん。ふうくもえぬ火かなく」

「名にしおふ賀茂の川かせ心せよ爪木にそふる花の一朵。いかに水汲殿へ申入候はん」

返歌

「身のわさをいやしく人やおもふらん月をもうけてになふ水桶」

賀茂河

聞是房

三「此物は我等をたはかりよせて、はちをあたへてはらはんとて、かやうに申物を、あらそこつや」

日羅房

二「日本の僧共は、如此をかすへきたよりもなく候や。いかさま、たうわたりしてたつね申へし。年老にて候へ共、一度は入唐の望みにてこそ候へ」

是害房

「しんたん、さすかに大こくにて候へは、あいかまへておほしめしたち候へ。此ほうしは、さる物にて候へは、御たつね候はんに、ゆめくかくれ申ましく候。あひかまへて」

四「何共おほせあれ、我等はたゞあたこひらのにめぐりて、ゆさんつかまつるまでにて候。氣すい、尤同心く」

五「物をしんしやくすれば、さりことなれとも、わかつてうのおほせもあけたくこそ候へ。しかるへくは、おほしめしたち給候へ。御とも申へし」

「おほせのことく、われくかふんさいにては、につたうまてはおもひもよらぬほとに、中くいやすき物を、たゞつし風つし、すまふのいてきたるこそ、おもしろくおもひ候へ。ちこくはそれこそとおほえ候へ」

「やりことんとく、とひのよはひをおもふにや、けふそちとせのはしめ成ける」

「鐘はきこえてよそおそき、おくはくらまの山みちの、花そし

るへなる、こなたへいらせ給へや」

日羅房

「しよほうしつさうとくいんすれば、みねのまかへもふつかいなり。万法一如とくとききは、たにのき神もれいしんなり」

「御酒のかんよく御入候。いまひとつきこしめし候へ」

是害房

「いや、言語道断、せんたいおもしろき事哉。けにや、きやうけんききよの事のわさも、三世諸仏のえんなるへし。あら、しゆせうや、まかしゆせうや」

日羅房

「あら、御名残おしや。又いつ御目にかゝり候はんや。何とせんすらむ。なふく、あまりにくせんかたなきまゝに、一首うちすてゝ帰るはおしき花のなみ

かゝるわかれにしほるとそおもふ」

日羅房

是害坊

「花の波すゑの松山こしかねて

月にやすらふ秋津島哉」

是害房

是害坊絵巻（徳江本）

「いかに、此内へあんなひ申候」「誰にて御座候ぞ」「是は、たいたうのてんぐしゆりやう、是界にて候」「さて、唯今は何の事これまてはるく御わたり候ぞ」「さん候。我国にては、いかなるきそうかうそ思こと またふに引入はは、心にかゝるものなし。まことやらん、日本はいまた、仏法さかりなるようけ給候間、しかるへき御寺御座候へは、せんたちめされ候へ」

「如仰、日本はそくさんへんの小国なりといへとも、今に仏法さかりにて候間、さるへきたより なく候。たいとうにかはり、神国にて候。わらはも 候程をうれひ候へとも、其かいもなく候間、唯今思ひかへしたまへかすとそんし候」

是かいほう、「さすか、たいたうよりはるくまかり越て、やみくとかへらん事むねんに存候間、いつくの寺へなりとも、先達めされ候へと、いかに日本のそう共、をこなひすまし居たりとも、はらはかひしゆつをつくし候はゝ、一てもとらすましき物など存候」「まことに、さやうにをほしめし候へは、ひへいさんへ御供申へし。かまいてく我らお御うらみたまふな。水を

もさうさまにならすほとんどの行者、いかほともあるへき物を、しかれとも、御とも申へし」

是かいほう

日羅坊

「みなくの前にてんまのかけかきし、辻風をふらすか間、くわらいのいんしゆにて、はねをこかし候へし」

是かい

「此火のいわれはいかなる事やらん。あらくなんきやく」

日羅

「にちらん、うちなかめてをもひつる事よ。さう、見つることよ。あらしらけく」

一輪大し

「是かい申事、さてもく此分にてはくちをしき事にて、今一たび此事の庭にてさまたけおなさはやと思ひ、大法事の庭に出てさまたけをなすなり」

「善悪いのちをかけて、八たひ童子にわたし候はく、明王の氣はてにかけんするそ」

「我等かじやうしたてまつる行者のまいる。今日物みかけをす事實悟是即返事也。せんなく命をとるへし」

是かい

「たゝこれをきりてあるか、さるましく」

「たゝよくくしはるへし」

「御たすけ給り候へ」

「たゝかうへをうちわれ」

「さやうにはめされそ。日羅かわひ事にて候」

「さすか、日本をあなつるさまたけをなすものを、たゝいため候へ」

日羅坊

「わらは同心にてなく候。日本の名をもあけ度こそ候へ。何事も同心一事哉。御ゆるし候へ」

二童子のいはく

「なんしも是かいと一味同心たるへし。せんあり明王に申て、たゝおくまし。是かいはもとより命をたつへし。され共、慈悲は上よりしたへくたる。なんじかうけにたち、仏法をもそたては、命はかりをたすくやう、かまいてく日本へきたるなど、よくくいひきけよ」

「いや、岩の上のしやくし柿、かなつちとてかふとは、是かいはうふるまひ、大けなき事かな。あらおかしや、是かいほう」

「いや、はなしの大ねたてみして、からいめにあいたるは、くやしくやをやる。あらむさんや、是かいほう。こり給へ、是かいほう」

「いや、くひに縄をつけらるゝは、へうたんかや、是かいほう」

「いや、入ことをしつるか、一手もとらてかへるはゑせ戸かや、是かいほう」

「いや、ゑせうたか、是かいほう。こしをれて見ゆるは、短冊か、是かいほう」

「いや、薬湯の中へ是かいほうを入れて、によも、ひよれくく、とふくよ」

「いや、物のはちのあたりたるは、たいこや、是かいほう」

「いや、ひめのまへのまもりかたな、させる事もなくて、あらひさんや、是かいほう」

「いや、時まにあらね共、かいふひてをらしよ、是かいほう」

「いや、しめ縄をかけて、ちやうくとうたるゝは、つゝみかや、是かいほう」

「いや、こしの程にゆいつけて、かくらをうたるゝは、やつとちかや、是かいほう」

「いや、雨か下に猶もしたる、是かいほう。こほねかをれてみゆる、是かいほう」

「いや、神仏にきらはれて、何のかふにもたゝぬほとけの花か、是かいほう」

「いや、一むら雨の折ふし、はやしにつれてわたるは、郭公、是かいほう」

「いや、火界のしゆにこかされて、はねの色もみちかや、是かいほう」

「いや、仏たちにふまるゝは、れんけかや、是かいほう」

「いや、しほくとちり行は、花雨かや、是かいほう」

「いや、ゑたはかしうひて、ちからなけにみゆる、青柳かや、是かいほう」

「いや、おひまはしてけらるゝは、庭のまりかな、是かいほう」

「うめきすめひかゝるゝは、れん歌するか、是かい坊」

「しつくとかきたまへ。ゆられて目のまい候へは、いかなる日我国を出て、かゝるうきめにあふやらん、うらめしさよく」

「いや、はらわれてかゝるゝは、あくひかや、是かいほう」

「是は、日羅房のちやくしの上は、殊の外のくわんたいなる事を、是害坊にあかいて申候へ」

日羅坊

「かゝるなんきなる事か哉。我等までしられてめんほくなき事哉。人のけうくんきすして、あらせしや」

「御せんじもの持候へ。参にき程に御さまし候て、御まいりあるはし」

「御あしか参候へし」

「今はあけまいらせ候へし。御あやまいく候すらん、いかゝ」

「今すこしまちくつゐてに御ゆ所をたて候へし。あらよき程のゆうのかげんや」

「さのみはゆる御とくにて、ほとを御はからい候て、御あけ候へ」

「此竈の中に、よろつ薬共入候間、一たん良くあかへら候。仏たちにたゝかれて、すちほねいたく候事も、けんになり候へし」

「木はもへすけふりはかりのかまとをはにきあふたみと人やいふらん。ふうくもへぬ火かなく」

「名にしおふか茂の川かせ心せよ爪木□□ふる花一枝。いかに

水汲殿へ申入候はん」

「身のわさをいやしと人や思うふらん月をもうけてになふ水をけ」

賀茂川

もんせんはう

三「此物は我等をたはかりよせし、はちをあたへてはらはんとて、かやうに申物を、あらそこつやく」

日羅房

「日本の僧共は、如此をかすへきたよりよもなく候へは、いかさま、たゝわたりしてたつね申候へし。年老にて候へ共、一度はにてうののそみにてこそ候へ」

「しんたん、さすかに大こくにて候へは、せかいほう、あいかまへてをほしめし立候へ。此ほうしは、さる物にて候へは、御たつね候へんに、ゆめくかくと申ましく候。あひかまへてく」

「何ともおほせあれ、我等は、たゝあたこひらのにめぐりて、ゆさんつかまつりにて候。気すい、尤同心く」

九「□□しんしやくすれば、さりことなれとも、わかつてしのなをもあけ度こそ候へ。しかるへくは、をほしめし立給へ。御と

も申へし」

「やりことんとく、とひのよはひをおもふにや、けふそちとせのはしめ成ける」

是かいはう

月にやすらふ秋津島かな」

日羅房

「しよほうしつさうとくいんすれば、みねみまかへもふつかいなり。万法一如とくとくときは、き神もまいんなり」

「御酒のかんよく候へは、いま一つきこしめし候へ」

是かいはう

「いやく、言語道断、せんたいをもしろき事哉。此にて、きやうけんきぎよの事のしわざも、三世諸仏のしんなるへし。あら、しゆしようや、まかしゆしようや」

日羅房

「あら、御なくりをしや。又いつ御目にかゝり候はんや。何とせんすらむ。なふく、あまりにく／＼せんかたなきまゝに、一
首、

うちすてゝ帰るはをしき花のなみ

かゝるわかれにしほるとそをもふ」

日羅房

「花の波末の松山こしかねて